

## 第18回県政知事懇談

# 湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成22年11月20日（土）  
と ころ 海田町福祉センター

広 島 県

目 次

頁

開 会 .....	1
懇 談 .....	2
自由討論 .....	35
閉 会 .....	45

## 開 会

(知事(湯崎))

皆様、こんにちは。県政知事懇談を始めたいと思います。

まず、私から一言御挨拶をさせていただきたいと思います。

この懇談会の趣旨ですけれども、今、1年ほどかけまして県内23市町をずっとこういうふうに戻っております。我々県の行政というのは、実は直接住民の方と対話をする機会というのが意外と少ないのですけれども、この会はそういう市や町の行政機関経由ではない、直接皆さんの感覚を受けとめていく、感じていく、そういう会としてやらせていただいています。

そういう意味では、特に何か具体的な個別の行政課題を取り上げて、それについて考えていきたいと思いますとか、そういうことではなくて、普段暮らしの中で感じていらっしゃることをお話しいただくというのが我々としてはありがたいと思っております。

その目的は、今、申し上げたように何か問題解決をするというのではなくて、いろいろな方々のお話を集めていくと、いつも味噌樽と言っているのですけれども、だんだんと味噌樽のようにいろいろたまって行って、それを行政のいい味付けにすることができると思っています。そういう意味では、行政をしていく上での基礎というか、そういうふうに我々としてはしていきたい。この広島県ならではの味噌味が出ればいいなと思っております。

これとは別に、市長や町長と懇談をやらせていただいております、そちらのほうは比較的具体的な課題も議論させていただいております。

この両輪で地域の皆さんがどういうことを感じていらっしゃるのかということを受けとめながら、県政を進めていきたいということでございます。

以上のような趣旨でございますので、これもいつも申し上げるのですけれども、どなたかに遠慮されとかいうことなく、普段お感じのことをそのままおっしゃっていただくというのが本当に大事だと思っております。是非よろしく願います。

また、今日はとてもたくさん傍聴にも来ていただいております、本当にありがとうございます。こういう形で懇談に直接お話をいただく方も、傍聴の方も、土曜日でお休みの方もたくさんいらっしゃるのではないかと思いますけれども、そのお休みの時間を割いていただきますことを大変感謝いたしております。

これから最初90分ほど、お一人ずつお話をいただきまして、その後、時間が30分あまりそのとおりに残りますので、全員でお話をさせていただくというふうに進めさせていただきたいと思っております。ただ、その時間配分も別に堅苦しいものではありません、皆さんのお話で終わってしまうということもよくあるのですけれども、あまり気にせずに進めさせていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

## 懇 談

(知 事)

それでは早速お願いしたいと思います。順番に行きたいと思いますので、最初、中村さんからお願いします。

(中 村)

今日は呼んでもらってありがとうございます。「瀬野川を楽しむ会」といって、海田町のど真ん中を流れている瀬野川なのですけれども、10年前、ちょうど2000年の春ぐらいから浚渫工事が随時行われてきていたのです。そこにはエビや様々な魚が多くいたのですが、どうにかこれを治水と利水と、生物が住める環境を残して、子どもらに残してやりたいと思って活動しています。それが一番初めのときに、ちょうど長良川とか諫早湾とかの干拓工事が重なっていたのですけれども、その提案を広島県の工事関係の人に呼びかけたら、協力してもらえて、10年間やってきた結果、毎年延べで1,000人近くの子ども、保育所から大学生まで案内できる環境ができたのです。

それで今度は、以前から瀬野川の河川敷にセイタカアワダチ草やブタクサといってアレルギーの原因になる草が蔓延していたのを、植栽でいろいろな花を植えたいという話をしていたのですけれども、なかなか手続きが難しかったのです。それが今年はいろいろな人の協力を得て100mほど植栽ができるように許可も出て、地元の保育所、子どもたちと一緒に植えて回りました。やっとここまで来ました。以上が大体大まかな活動している内容です。

(知 事)

ありがとうございます。瀬野川は、水道水も瀬野川からというぐらいきれいな水で、そういう意味では、地域にとっては大きな財産ですね。

(中 村)

そうです。本当にすごい財産だと思います。

(知 事)

それをみんなが楽しめるようにいろいろ活動されているということ。

(中 村)

ええ。1980年代以降ほとんど見ることがなかったゴクラクハゼという魚を、今年瀬野川で地元の子どもが捕獲に成功して、テレビにも出ました。その後で今度はオヤニラミとい

う、これも珍しい淡水の魚なのですが、それも家族が見つけてくれたのです。後で写真があるので見てください。

(知 事)

そうやって自分たちの地域の財産を自分たちで手入れしたりとかすると、愛着も沸きま  
すよね。

(中 村)

そうなのです。本当に。

(知 事)

特に資金的なサポートがあるのですか。

(中 村)

今はまだ僕らの瀬野川を楽しむ会のみんなのボランティア活動ということで、ほとんど  
資金は要らずに、全部手弁当でやっています。今回は花の植栽ということでちょっと資金  
がかかったのですけれども、それも地元の御年配の方が、中村さんがやっているのなら手  
伝ってあげるよとって資金提供してくださって、来年の5月から9月には19種類の花が  
咲き乱れると思います。

(知 事)

そうですね。それは楽しみですね。ありがとうございます。

今、御質問した趣旨は、こういう懇談会をずっとやっていると、各地でいろいろな活  
動があるのですけれども、それを見ていますと、あまり言うとかれですけれども、行政か  
らたくさんお金が出ているところよりも、自分たちで工夫してやっていますというところ  
のほうが、活動が活発で長続きしているように思えるのです。なので、中村さんの活動も  
10年間これまでやってこられて、そうやって地域でもたくさんの人を巻き込んでやられて  
いるというのは、ひょっとしたらそうなのかなと思って、やっぱりそうだったということ  
です。本当に熱意と、皆さんを巻き込んでやるというのが一番いいことですね。

(中 村)

頑張っています。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、広瀬さん、お願いします。

(広瀬)

「かいた緑のネットワーク」の広瀬でございます。先ほどはシルバー人材センターのまつりに出ていただきまして、ありがとうございました。餅つきまでやっていただいたそうで、すばらしい光景でございました。ありがとうございました。

緑のネットワークというのは、公衆衛生推進協議会というのがあるのですが、そこから派生しまして、とにかく地球温暖化の対策をしようではないかということをつくったのがこの会でございます。昨年4月16日に設立いたしました。

構成としては、私どもの公衛協や、あるいは広島県の地球温暖化防止活動推進員という、県では環境保全アドバイザーと言うのですが、これが9人おりますので、それとか、あるいは海田町の小中学校の校長会とか、あるいは当然町もそうですが、こういったものが入って設立いたしました。

具体的には、とにかくテーマを決めてやらなければいけませんので、緑のカーテンということで、今、はやりでございますので全国いろいろなところでやっていますが、それを一つ、この町内に緑のカーテンを、施設はもちろん、個人の家々、いろいろなところに普及させようじゃないかということで現在やっております。

具体的には、マップづくりをしています。マップをつくって、どういうところへ緑のカーテンをやっているかということで、それはすごく見やすいものですから、昨年と今年も同じようにやっておりますので。

(知事)

去年と今年ですね。

(広瀬)

はい。昨年調べましたら96カ所でしたが、今年は323カ所と。

(知事)

随分増えましたね。これはちょっと皆さんに御覧いただくといいですね。小さいかもしれませんが、地図自体がこっちのほうが大分大きいというか、狭い地域なのですが、こっちの地図になると、地図に入っている地域自体が随分大きくなって、この点は何倍というぐらい増えていますね。

(広瀬)

昨年との比較です。

私どもは全くの住民でございますので、みんなが集まって、いかにして1軒でも多くするか。そこでコミュニティーができるのではないかと想着いて、現在それを中心にやらせていただいているところでございます。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。これは本当にすごい勢いなのですけれども、平成21年度は96カ所、今年度は323カ所、4倍弱ですよ。

(広 瀬)

そうですね。

(知 事)

この鍵は何だったのでしょうか。

(広 瀬)

一つは、そのマップをつくりまして、こういうことをやっていますよと、必要なおところに配りました。そこにつくり方であるとか、あるいは種類別とかを入れたり、それからゴーヤの料理レシピを募集しまして、その内容を書いたりしました。学校での環境学習、小学校はもちろん、中学校もそうです。それと、広島市で昨年か一昨年に、あるいは町の広報に載りまして、これは、結構大きなインパクトがございました。また、植物公園でいろいろな教室をやっておりまして、マスコミに出していただいております。私どもの力だけではなくて、そういうことが大きいのではないかと想着います。

(知 事)

ゴーヤがネットワークキャラクターで。

(広 瀬)

はい。それは提案をいただいておりますので、今、名前を募集しているところでございます。

(知 事)

これだけたくさん海田でゴーヤがつくられると、海田のスーパーではゴーヤが売れなくなってしまうみたい。

(広 瀬)

京都のほうでそういうことがあるらしいです。

(知 事)

そうですか。これだけ拡大していくというのは、見ても楽しいですね。きっとここでも、あそこでも、もちろんゴーヤだけではなくて、アサガオとかヘチマとか、オーシャンブルーとかフウセンカズラとか、いろいろあるのですけれども、ここでも増えた、あそこでも増えたと、楽しいですね。

(広 瀬)

楽しみです。ですから、私どもも1軒でも増やしたいということで、長く続けてまいりたいと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。ちなみに、広瀬さんは、先ほどのシルバー人材センターの理事長でいらっしゃいますよね。

(広 瀬)

はい。

(知 事)

またそのエネルギーはどこからくるのですか。

(広 瀬)

そこには書いていないのですけれども、小学校へ環境学習に参ります。また、小学校で挨拶運動をさせていただきますので、そのエネルギーかなと思っております。

(知 事)

そうですか。子どもたちからね。

(広 瀬)

そうです。今日も幼稚園の方が出ましたよね。知事さんも一緒にやっていただきましたが、ああいう世代間の交流が、一番力が出るのではないかと思っております。

(知 事)

なるほど。ありがとうございました。



それでは、森川さん、お願いいたします。

(森 川)

森川です。私は音楽を通じて地域の皆さんとの親睦を深めたいと願って、音楽ボランティアの活動を行っております。どうぞよろしくお願いいたします。

海田町にはすばらしい活動をされている方がたくさんいらっしゃる中で、私どもがこの場においていいものかどうか恐縮な思いでいっぱいなのですが、今日発表させていただけるということで、資料をつくりまして家で読んだら 15 分もかかって、知事もこの資料を見て、これを言うのかなと思われていたのではないかと思うのですが、省略して 3 分以内で収めたいと思います。

私たちの活動の自慢話をちょっと聞いてやってください。ボランティアと名付けると、してあげているというようなニュアンスに受け取られるので、私たちの場合は、お客様のほうがボランティアで私たちの演奏を聴いてくださっているというような、そういった感じで活動をさせていただいております。

拠点としては町の施設のひまわりプラザをお借りして、そこでは年に 8 回、ふるさと館とあわせると全部で 9 回のコンサートを手掛けております。夜のコンサートが 5 つ、昼間のコンサートが 2 つ、それからふるさと館が 1 件ということです。大人だけのコンサートもありますけれども、地域の中学生の団体の方にも出ていただいて、子どもたちの積極的な演奏活動を生み出したいという気持ちがありまして、ジュニアロビーコンサートも行っております。

私たちはこうして活動しているのですが、ボランティアをするほう、受け入れてくださるほう、ともに融合しあわないと楽しくないのではないかと考えております。強制的にボランティアをしましょうということは私自身やりたくないのも、また長く続けようとも思っておりません。だから、1 年 1 年、今年もやりますかという問いから始まるのですけれども、かれこれ 10 年たっています。活動費も、町からの援助とかは一切ないです。自分たちで年会費を集めています。各団体年会費を集めて、それで通信費、それから、お客様には軽い気持ちで来ていただきたいのでお茶とかキャンディーとかを御用意させていただいて、そういった接待費、それから印刷費、そういったものに使わせていただいております。1 年たって、また 1 年やるという感じで続けて、10 年たったわけですが、これで困っていることとか感じることはありません。活動の場として、すみません、町の方がいらっしゃる言いにくいのですが、施設を使わせていただいているのですが、やはり職員さんの異動というのが入ってきます。3 年に 1 回ぐらいは窓口が変わる。そうすると、その方の音楽に対する関心度、そういったことで扱い方が、気持ちが通じ合える方と通じ合えない方がいらっしゃるということが、ちょっと気持ちが寂しくなるなど思うときがあります。

それから、ボランティア活動をしていると、どうしても経済的な負担が個人的にかかってまいります。一番私たちでお金がかかるのは、活動のための部屋の使用代です。共催していただいているひまわりプラザさんはすごくよく私たちに御協力いただきまして、当日の会場費とか控え室とか無料で貸していただいて、本当にありがたい話なのですけれども、それにかかわる練習の場も少し免除していただいています。ただ、共催していただいている館ではそうなのですけれども、ほかのところで借りられるかと言ったら、そういうわけにはいかない。そこでやっているものだから、そこで借りなさいと。ピアノがある部屋でないと使えないという団体もあります。でも、それはしょうがない。自分たちも技術の向上ということで、皆さん同じ立場だからということで、お部屋代を支払って練習させていただいているのですけれども、何にしてもお金がかかることです。少しでも町の方の免除ということができればうれしいなと思っているのですが、調べましたら、安芸区の福祉センターではボランティアの組織ができています。こうやってボランティア活動をされている方が定期的集まって、こんなボランティアをしていますよという連絡会をするだけで、どこでも、市内でも、安芸区でも、ボランティアをされているそのための練習だったらお部屋は無料で貸し出しますという組織がつくられています。そういったことが海田町にもあったらいいな、うれしいなと思っております。

個々の施設ごとに、館ごとに、いろいろなことをされていると思うのですけれども、横のつながりがないかなと、今ちょっと思って、ちょっと寂しい思いをしています。

(知 事)

なるほど。

(森 川)

すみません。言いたいことをぼろぼろと。

(知 事)

そのための会ですから。

(森 川)

言っているのかなと思いついてしまいましたけれども、私にとって、県知事さんはいろいろなところに数々行かれて、宝物をいっぱい探してこられたと思うので、それもお聞きしたいと思いますし、私にとっての今の宝物というと、家族とか、そういった私的なものは違う宝物箱があるとして、音楽仲間と、あと貴重な時間を割いて来ていただいているお客様、それから、心を豊かにしてくれる音楽、私はこれが自分の宝物だと思っております。以上です。

(知 事)

ありがとうございます。音楽をやられる方はたくさんいらっしゃると思うのですが、こうやって集まれる方は、皆さん、どんな方が多いのですか。お仕事を持っていらっしゃるとか。

(森 川)

ほとんど皆さんお仕事を持っています。いろいろなところで個々に活動されている方です。その人たちが集まって、またここでも何かをやろうという形なので、私が一応発起人、起ち上げた人間なのですけれども、こうして、ああしてというおぜん立ては全然いらいんです。今度これをしましょうと言ったら、それに対してみんなが、私がこれをする、自分がこれをする、積極的に動いてくださっています。

(知 事)

先ほどボランティア活動のための施設料が無料という話は、そういういろいろな方が集まって、それこそ横の団体、音楽だけではなくて、今日もたくさんいらっしゃいますけれども、いろいろな方が一緒になって、それこそ連絡協議会をつくって、こんなのをつくりましたからお願いしますと町に持って行かれると、ひょっとすると聞いていただけるかもしれないですね。だめかもしれませんが、それは何とも言えませんが。

(森 川)

きっとそれを起ち上げると、そのトップに上がらないといけないので、また仕事が増えるかなというのがあるので、なかなか。

(知 事)

やっぱり言い出しっぱね。でも、そういう方がいらっしゃるというのが、やっぱり活動の鍵なのですよね。きっとね。だから、引き込まれるというので。

(森 川)

どなたか是非。

(知 事)

でも、その件で私から一つだけあるのは、行政の目から見たときに、皆さんに無料でお貸しするということはできないのです。つまり、営利目的だとか、本当に個人の趣味でやるとか、例えば有料スタジオみたいなのがありますけれども、そこへ行くとお金がかかる

のでやりたいという方が多分いらっしゃいますよね。そこの区別を付けるためには、今度は本当にボランティアでやっていらっしゃいますよねと、活動に対する干渉みたいなのが始まってしまう。いいこともあれば、よくないこともあるという両方の側面が出てくると思うのです。それはどうお考えになるかということだと思っておりますけれども、それをまた考えていただいて、でも、実際にボランティアをやっていく上では、負担の問題というのは結構大きいと思いますので、結束するというのも一つの手かなというふうに思います。

(森 川)

そうですね。でも、お金には換えられない私たちの気持ちを和ませていただき、気持ちを元気にさせていただいているので、本当に、ボランティアと言っていいのかどうか、今からも活動を続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

(知 事)

是非是非。ありがとうございます。

それでは、森本さん、お願いいたします。

(森 本)

海田町に住んで 12 年目のママです。午前中は私たちの活動の「ホットスペース」のほうに参加していただきありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。お邪魔しました。

(森 本)

その後にメンバーで少し話をしたのですが、やっぱり子育てをしているお父さんだねとみんなが言ったのです。それは、みんな子どもたちが来ていて、普通に手遊びも入ってくださって、子どもたちがうわーと寄って行っても、普通だったらどうやって抱っこすればいいのか、今までの方だったら、ほかの方が抱っこして膝に座らせて、という形だったのですけれども、普通に抱っこして話しかけて手遊びをして、やっぱり子育てをしているお父さんだねということ。

(知 事)

そうなのです。うそじゃないのです。

(森 本)

ちょっとうれしかったです。やっぱり自分たちのお父さんたちにもその姿を見てもらいたかったねというのもあって、みんな仕事だったので、残念だったねという話をしました。

ただ、そういうお父さんが参加してもらえるとというのは最後の理想であって、私たちの今の希望は、家の中で子育てをしているお母さんたちが、子どもと常に1対1で煮詰まっている時間を、ちょっと私たちとかかわるとか、外に一步出ること、ちょっと見方を変えて子育てができるようになればいいなと思っています。私たちはママなので、ママがママにできる支援がないかということで日々奮闘しています。

メンバーは、今日見ていただいたので分かると思うのですがけれども、本当にママばかりで、自分たちができることを自分たちができるときにやろうということで活動しています。一昨年までは月に4回とかいう形で、午前中のような「ホットスペース」、ママが来てほっとできるようなスペースをとということでやっていたのですが、私たちも仕事をしないと家計が成り立たないという現状で、みんな働き始めまして、今のところそういう時間調整が難しかったり、金銭的な問題がかかってきたり、ということで、今は1年に1回のイベントと、あとは自分たちができるときに時間をあけて、こちらのひまわりプラザとか福祉センターとか場所をお借りして、支援という形で活動をしています。

今回、県の事業でこども夢財団の助成を受けまして、府中のサークルさんたちとか、古市のサークルさんたちと一緒に、7月から1週間に1回ずつということで3ヵ月にわたってママを対象とした医療講座をさせていただきました。

(知 事)

県もいい事業をやっていますね。

(森 本)

そうですね。今回、初めての助成を受けた形だったのですがけれども、本当にお金が出るということで、やっぱりママたちも自分たちがしたことに対して、これだけやったんだね、できたんだねと。今まで無償でみんな時間を1日あけてという形だったのですがけれども、自分たちがしたこと、これをもらってもいいのとみんなが言うのですがけれども、いいよと。いつも本当に無料で、自分のお金を出してもらっている状態だから、いいよ、いつもありがとうという言葉で出してもらったのですがけれども、みんなそれにすごく感激して、そういう助成を受けての活動もしていきたいし、ない形で自分たちができる範囲内というの、私たちが今できるのは、行政のほうに力を貸していただいてという活動なので、それを両方で続けていけたらいいなと思っています。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。午前中お邪魔させていただいて、本当にさっきおっ

しゃっていましたけれども、都会だと、特に主婦の子育てというのは、おじいちゃん、おばあちゃんが近くにいなかったりすると預ける人もいないし、ずっと 24 時間子どもとしかいないということが起きますよね。旦那さんが出張に行ったりして、僕もそうでしたけれども、例えば 1 週間出張でいないとかなると、本当に 24 時間子どもとしか会話しませんが、みたいな感じで煮詰まっていたり、それをママ友のように、そういう形でお互い支え合うというのはすごくいいことだと思います。公園デビューというのもなかなか大変だったりして、ああいうちょっと気軽に参加できる場所があると、すごくいいな、安心できるなという感じがしました。

(森 本)

私たちが活動していることを耳にして、2人でくすぶっているというか、煮詰まっている親子でも、ちょっと行ってみようかという気持ちになってもらえたら、私たちだけではなくて、ほかの人とのかかわりもできるので、本当に私たちはきっかけの一つになればいいなと思って活動している感じです。

(知 事)

そうですね。行政もいろいろな活動をされているところの主体性を損なわないような後押しをするというのが僕はいいのではないかと思うのです。

(森 本)

私たちも今いろいろなところに出張という形でスタッフが行って、そちらで親子遊びを伝授したりというのをやっているのですが、そういうところに一步出たときに、やっぱり金銭的なものがかかわってくるので、県のほうに登録をしていれば、その辺はどどこ皆さんの団体なら助成はできますとかいう形で、会場は無料ですとか、さっきの森川さんではないですけども、そういう形のシステムがとってあれば、みんな活動がしやすいのではないかと思います。審査は難しいとは思いますが、ですけども。

(知 事)

そうですね。はい。ありがとうございました。

それでは、野崎さん、お願いします。

(野 崎)

皆さん、こんにちは。私は明治乳業の広島工場で業務を担当しております野崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は実はこの 4 月にまだ転勤してきたばかりでございまして、広島に住んで半年あまり

という形でございますけれども、そういった短い在任ということなのではございますけれども、当工場での取り組みについてお話をさせていただきます。

当工場は、牛乳、ヨーグルトを製造している工場になりますけれども、再来年に創立 50 周年を迎える古い工場になりますので、工場見学の受入れに対応している工場ではございません。そういった意味で、工場見学はできない中ではございますけれども、その中での工場の活動ということでお話しさせていただいております。

こちらのパネルを使いながら御説明さしあげます。まず、こちらは海田中学校さんで職業講話という授業をされているということで、そちらの講師の派遣ということで御依頼いただいた時のものです。お寿司屋さんですとか、理容師の方ですとか、いろいろな業種の方がいらっしゃるのですけれども、その中で乳製品製造という工場の御紹介をさせていただいています。実際に製造の現場でこういった仕事をしているのか、こういったパネルを交えながらお話をさせてもらっているのですけれども、講話の部分と質疑応答の部分と半々ぐらいの形で授業をさせてもらっているらしいのですけれども、結構質疑応答の質問の時間にも、生徒さんのほうから非常に活発に質問が出て、地元の工場ということでいろいろ興味を持ってもらっているということで、話しているほうとしても楽しいということで、そういった感想を聞いております。

それから、今度は海田中学校の 3 年生の生徒さんを職場体験学習という形で受入れをしております。工場の見学に対応している工場ではありませんので、スペースの問題とか安全の問題がありまして、中のほうまで入ってもらって実際の作業をしてもらったりするのはなかなか難しいのですけれども、このような形で、見学よりはもう少しさらに踏み込んだ形での仕事体験みたいなことをやっております。

(知 事)

それは工場の一部というか、ラインではないけれども。

(野 崎)

製造現場の中ですね。ただ、人数がどうしても限られてしまうので数人という形でしか受入れのほうができないという形です。

(知 事)

食品はなかなか、衛生管理上大変ですよ。

(野 崎)

そうですね。衛生管理の部分と、あと安全面の部分がありますので、実際に作業をしてもらうということになると、安全教育だけで数日かかってしまいますので、なかなかその

部分では難しいということです。

それから、先ほど瀬野川のお話がありましたけれども、瀬野川の清掃活動をやっているということで、工場としてもこのような形で清掃活動に参加させていただいたりしています。

(知 事)

御一緒されたりするのですか、中村さんと。

(中 村)

まだないです。

(野 崎)

こういった作業服を着て作業している人間がおりますので、是非声をかけていただければと思います。

(知 事)

きっといろいろなグループでやられているんですね。

(野 崎)

そうですね。たくさんいらっしゃるようです。

それから、こちらは町のほうで、地域振興事業で祭りなどもされていますので、そういうときにいろいろ参加させていただいたりしているということです。

それから最後になりますけれども、食育活動を、広島市内にあります支店のほうで食育を担当している組織があるのですけれども、そちらのほうと協力をするような形になるのですが、小学生またはそのPTAの方々を中心に、規則正しい生活をして、栄養バランスを考えた食事をしていこうという趣旨で、話だけではなくて、いろいろ、例えばクイズや、実験みたいなこともしています。生クリームからバターをつくる実験を実際やってもらい、いろいろ楽しみながら食育になじんでもらえるような、そういった機会を提案しております。

ただ、支店のほうからの要望ということが意見としてあったのですけれども、小学校にそういった御案内をいろいろ差し上げても、カリキュラム等が過密なのか、なかなか申し込んでいただけないようなのです。ですから、もっとどんどん活用していただければと思うのです。どんどん出前授業を差し上げたいと思っています。

(知 事)



せっかくですからね。

(野 崎)

以上のような形で地域に根ざした工場ということでやっております。

(知 事)

ありがとうございます。ちなみに、野崎さんはこの春からということですが、以前はどこにいらっしゃったのですか。

(野 崎)

東京のほうから参りました。

(知 事)

東京は、工場ではなくて本社ですか。

(野 崎)

そうですね。その前は別の工場にいたのですが。

(知 事)

そうですね。ちなみに、ほかの工場というのはどの辺ですか。

(野 崎)

仙台のほうですね。

(知 事)

なるほど。仙台と広島だと随分違うと思いますけれども、いかがですか。実際に海田に暮らされてみて。

(野 崎)

家の者と話をしたりしていると、私も実は子どもがまだ小さいのですけれども、家の近くなかなか子どもを連れて遊びに行けるような公園がちょっと少ないというのが、歩いて行くにも遠いところまで行かないとなかなか遊ばせられない。それをちょっと言っています。

(知 事)

なるほどね。そうやって明治乳業さんも地域に根ざしながらやられているということなのですけれども、広島に出荷されている牛乳とかヨーグルトというのは、大体この工場から出荷されているのですか。

(野 崎)

中国地区全体。岡山のほうにも工場がありますので、岡山と分担しながら、という形です。

(知 事)

そうですね。企業も、特に大企業ですと、なかなか地域貢献というのは、地域との密着度が薄かったりするのですけれども、そうやっていろいろ食育も含めて活動していただくと、地域とのつながりが深くなりますよね。小学生も忙しいかもしれないけれども、せつかくなので活用していくというのを考えてほしいと私も思います。ありがとうございます。またよろしく申し上げます。

それでは、石橋さん、お願いします。

(石 橋)

私は、まちづくり研究会「ほっとアニメ海田」の石橋といいます。どうぞよろしく願いいいたします。

私たちに会うと、ほっとする。そして、アニメーションのように動き回る。新しい発見や、気づいたことや夢で、それを語り合って、どうすれば実現できるかということも考えています。私たちにできることを、お金がありませんので、知恵と体力と人力で頑張っています。

今までやってきたことは、知事さんの後ろに控えております「ヒマ太」と「クラレ」、大きな着ぐるみがにっこり笑っておりますが、そういうものをつくっております。これは子どもたちからキャラクターを募集して、それから私たちがキャラクターで終わったらもったいないね、動かしてみようかとなったのです。動かすためには着ぐるみがいいよ、ということで私たちが着て歩いてみたりしております。イベントがあるときには出ております。

また、平成 16 年にはひまわり弁当というのを考えました。やっぱり子どもたちと一緒に考えたものなのですけれども。

(知 事)

なるほど。キャラクター弁当ではないですけれども、ひまわりね。

(石 橋)

そうですね。子どもたちが考えているからすごくボリューム満点で、ちょっと業者泣かせでしたね。とうとう断ち切れになってしまったのですけれども。

(知 事)

業者の人につくっていただいていたのですか。

(石 橋)

はい。頼んで。みんなで考えたのです。

(知 事)

これは2種類ですね。こちらは。

(石 橋)

こちらは豪華版です。こちらはちょっとお安いもの。

(知 事)

真ん中にあるこれは。

(石 橋)

ハンバーグです。

(知 事)

なるほど。

(石 橋)

そばろだったり、いろいろです。

(知 事)

皆さんにも見せてください。こういうひまわりのお弁当です。

(石 橋)

食育のときに1回展示したことがあるのですが、注文していただくと、町のお弁当屋さんでつくってもらえるということになっております。

それから、二枚目。

(知 事)

ヒマ太くん。これが今のですね。

(石 橋)

そうです。16年のときにキャラクターを考えたのです。その後、その後ろを見ていただいたら。

(知 事)

ああ、これは着ぐるみになりましたね。

(石 橋)

はい。登場しましたね。そして、一人ではかわいそうということで、恋人の「クラレちゃん」ができたということです。

そういうふうにして、私たちは子どもたちと一緒にかわりながらまちづくりを考えています。

いま現在は、海田西中学校の生徒さんたちと1年生の総合学習というところの授業にボランティアティーチャーとして参加させていただいて、40時間ほど、本当にボランティアで10人ぐらいがかかわっています。

きょうは、子どもたちが考えたクッキーを持って参りました。プレゼントいたします。ひまわりクッキーです。

(知 事)

ありがとうございます。これはひまわりですね。こういうクッキーです。

(石 橋)

このシールは子どもが考えたものです。それから歌を考えてみたり、踊りを考えたり、海田町のPRはどのようにしたらいいか。先ほど広瀬さんが環境のことをお話ししてくださいましたが、子どもたちも一緒になって、どんなところに緑のカーテンがあるか一緒に調べてみたり、瀬野川でどういうふうな生き物がいるのか一緒にかわっていただいたりしています。そして、日浦山、海田町に山があるのですけれども、その山のゲンカイツツジ、天然記念物ではないのですけれども、ちょっと有名な、なくなりつつあるゲンカイツツジはどうしたら増えていくかを考えています。

(知 事)

どういう字を書くのですか。

(石 橋)

カタカナでゲンカイツツジ。そういうものをどうしたらいいのか、子どもたちと一緒に考えています。

そして、私たちのほっとアニメ海田は、「人が輝けばまちが輝く、まちが輝けば人が輝く」をテーマにして活動しています。以上です。

(知 事)

いいですね。ありがとうございます。私はちょっと資料をいただいたときに、ほっとアニメで、でもアニメのことがちっとも書いていないので、どういうことかなと思っていたのですが、アニメのように動くということですね。

(石 橋)

そうです。動き回る人、地域アニメーターという、全国まちづくり協会というのがありまして、そこにまちづくりとは何だという勉強会があって、その地域アニメーターになった方が海田町には100人近くいるのです。登録をしている方もいらっしゃいますし、その勉強をされた方がたくさんおられるのです。海田町はせっかく自然も多いですし、ちょうど山陽本線と呉線の分岐点にも当たりますし。広島市の東にある町と言われるより、海田といえば分かってもらえる有名な町にしたい。

昔は開田（かいでん）と書いて（かいた）と呼んだそうです。

(知 事)

そうなのですか。

(石 橋)

それで、開く海田町になったらいいなということで、いつも夢を語っています。

(知 事)

ありがとうございます。そうやって子どもたちを巻き込んでやると、中村さんも瀬野川にかかわっていたり、広瀬さんもそうだと思いますが、郷土に対する愛着とか誇りというのが育っていきますよね。次の木林さんにちょっと振ってみようかと思うのですが、それはすばらしいですよ。

あと、このひまわりは、町の花でしょう。

(石 橋)

そうなのです。町花です。

(知 事)

このキャラクターは全くほっとアニメで考えられたのですか。

(石 橋)

これは、先ほどお見せしたように、募集して、町民から 700 近くの応募があって、そこから子どもたちが、普通なら教育長さんとか町長さんとかが選ぶのですけれども、そのスタッフのメンバーたちが、これがいいねと、子どもたちと選んだキャラクターなのです。そこまでで終わってしまうのではなくて、私たちは動き回らせる人なので、動き回らせようと、着ぐるみになりました。

(知 事)

普段、この「ヒマ太くん」と「クラレちゃん」はどこにいるのですか。

(石 橋)

住民活動センターに住んでおりますので、会いに行ってみてください。

(知 事)

普段はこういう感じで。

(石 橋)

そうです。にこにこ笑って立っております。

(知 事)

イベントがあると、動き出すということなのですね。

(石 橋)

そうです。動き出します。

先ほどひまわりという話が出たのですけれども、後ろに大きなじゅうたんのようものがかけてあるのですが、あれも西中の生徒さんが、海田町のひまわり畑というのがあるのですが、そこに「ようこそひまわり畑へ」と。ただ来ていただくよりも、誰もいないときもありますので、じゅうたんでようこそというふうに語りかけようというので、そういうのができました。

(知 事)

市の花とか町の花とかいろいろあるのですけれども、こういうふうに皆さんがすごく取り上げられるのは珍しいというか、すごく浸透している、定着しているという感じがするのですけれども、皆さん、そういう感覚ですか。

(石 橋)

そうですね。

(知 事)

やっぱりすごく浸透しているのですね。

(広 瀬)

私は一緒にやっています。

(知 事)

なるほど。

(石 橋)

子どもたちに海田町の花はと聞いたら、ひまわりと必ず答えます。言いますよね。

(木 林)

言います。

(知 事)

広島県の花は御存じですか。

(中 村)

もみじですか。

(知 事)

あたりですね。花じゃないのです。

広島県の魚は御存じですか。広島県の魚はカキなのです。なんだかおかしいでしょう。だから、花は花じゃないし、魚は魚じゃないし、でも、そうなのです。是非覚えておいてください。

そう言われたら、そうだなと思いますよね。もみじは、宮島をはじめとして有名ですし、

県の海産物はと言われたらカキと言いますよね。でも、広島県の魚なのです。広島県の貝というのはあまりつくらないと思うので、そうなのだと思うのですけれども。

(石 橋)

子どもたちが海田町のことを詩にしたのです。ちょっと読んでみます。黄色いひまわり咲き誇り、ひまわり畑、笑顔あふれる。日浦山にゲンカイツツシ、清い瀬野川、豊かに流れ、水鳥羽ばたき、魚がはねる。自然豊かな海田町。

(知 事)

いいですね。ありがとうございます。

(石 橋)

ありがとうございました。この詩、持って帰ってください。

最後に、この「ヒマ太くん」と「クラレちゃん」は、参議院議員選挙でメジャーデビューしたのです。知らなかったでしょう。

(知 事)

本当ですか。知らなかったです。いろいろなキャラクターがありますね。

(石 橋)

そうです。

(知 事)

ブンカッキーとか御存じですか。県のキャラクターなのです。

(石 橋)

はい。

(知 事)

これはイクちゃん。ああ、御存じですね。ほかにも8種類ぐらいあって、覚えきれないのです。整理をしましょうという話をしているのですけれども。

(石 橋)

後ろのほうに「ヒマ太」と「クラレ」がおりますので。



(知 事)

海田のキャラクターですね。

(石 橋)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、木林さん、お願いします。

(木 林)

広島県立海田高等学校から参りました木林華菜と申します。よろしく申し上げます。

家政科では、資格取得や課題研究を通して、将来のスペシャリストを目指しています。入学時から調理の基礎を学び、2 学年かけて、日常的な献立や調理を学び、それを生かして地域の高齢者の方をお招きして、ふれあい交流会という、松花堂弁当を手づくりでお渡しするという活動を行っています。平成元年から 22 年間続けていて、その活動というのは、高齢者の方々の健康状態や栄養的特徴を理解した上で、おもてなしの献立作成を身に付けるために行っているもので、海田町社会福祉協議会の方々の協力や支援を得て、ずっと続けてこれています。

そういうのをやっていく中で、お年寄りの高齢者の方々がお弁当を開けた瞬間に「わあすごいね」と喜んでもらえるのです。そういうのを私たちは見た瞬間に、頑張っってよかったなと思って、そういうコミュニケーションを通していく中で、次に新しいことにチャレンジしようという勇気もいただけます。そういうのが後輩たちにもどんどんつながっていけばいいなと思っています。

また、先日、本校の伝統である海高レストランを開かせていただきました。海高レストランというのは、その交流会の発展的な活動で、3 年間で学んだ調理技術や献立作成能力を西洋のフルコース料理をつくってもてなすというものなのですが、今回は榎田さんが。

(知 事)

教育長ですか。

(木 林)

榎田教育長さんをはじめとし、数々の地域の方々が来られました。

(知 事)

食べていかれたのですか。

(木 林)

はい。食べられました。

(知 事)

ちっとも報告がなかったです。

(木 林)

おもてなしさせていただいたのですが、そういうおもてなしをする中で、「すごいね」とこれも言っていただけるので、こういうのもまた後輩につなげていきたいし、地域の方々と触れあうことがあまり私はないので、こういう場がもっともっと増えていけば、いい町になるのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。お弁当は 20 年間ずっと続いているのですけれども、毎年何を入れようか、その年に考えるということなのですか。

(木 林)

はい。

(知 事)

それはどんなものが入っているのですか。

(木 林)

海田町とか広島県のものであるとか、味とかちょっと変えてみたりとか、量とかも考えてみたり、あと見た目、開けた瞬間「わあー」となるような見た目や盛りつけをいろいろ考えて、毎年違ったものを製作しています。

(知 事)

前の先輩がつくったものはずっと残っているわけですか。

(木 林)

前の先輩がつくられたのを写真で見たりとかして、どの作品も開いたときに「わあー」

となるような作品なので、これからも続けていきたいと思います。

(知 事)

なるほどね。では、毎年、毎年、そうやって先輩のから学びながら、今年はどういうふうにやろうと、みんなで相談しながらつくるのですね。

(木 林)

はい。班でいろいろ考えて。

(知 事)

班ごとに違うのですか。

(木 林)

はい。

(知 事)

それはなかなか大変ですね。勉強したことの集大成みたいなものですか。

(木 林)

はい。

(知 事)

フレンチのフルコースというのもすごいですね。

(木 林)

これも3年間学んだことを生かして、どういう盛りつけにするか、ソースの色とかもこだわってつくっています。

(知 事)

ちなみに、何人ぐらい招待されるのですか。

(木 林)

海高レストランでは30人ぐらいを招いて、ふれあい交流会では40人弱ぐらいの方を招いて、おもてなしをさせていただきました。

(知 事)

そうですか。楽しみですね。

(木 林)

是非来年は。

(知 事)

無理矢理言わせたような。そういう意味ではないのですけれども、御招待いただければもちろん喜んでなのですけれども、ちょっと誘導したみたいで、ありがとうございます。

でも、ふれあいが少ないと言っても、そうやって地域の人と交流があるというのは、むしろふれあいがあるほうではないですか。普通は、高校ぐらいになるとあまり地域と何かやりますというのは少ないですよ。

(木 林)

はい。この学校は保育実習とかもあって、いろいろな世代とかかわれるのですけれども、もっとあれば、もっと豊かな感情とかも生まれるのではないかと思います。

(知 事)

いつも高校生に来てもらったときに聞くのですけれども、来年は高校を卒業しますよね。その後、決まっているのですか。

(木 林)

まだです。

(知 事)

まだ決め中ですね。その後、広島に住み続けたいですか。

(木 林)

はい。

(知 事)

すばらしい。これで大分確率が上がってきました。最初、みんな「いいえ」と言われて、0勝3敗ぐらいだったのが、だんだん持ち直してきて、イーブンぐらいかな。

海田に住み続けたいですか。

(木 林)

生まれた場所も海田なので、ずっと海田町にいたいなと思っています。

(知 事)

素晴らしいです。海田のいいところはどこですか。

(木 林)

お年寄りや高齢者の方とか、歩いていて、目の前に来られたりすると、「こんにちは」とかすごく温かく話しかけてくれたりするの、海田町、すごくいいなと思いました。

(知 事)

僕のイメージは、実はきょういろいろなお話を聞かせていただいて、いろいろイメージと違うと思ったのです。僕はちなみに五日市なのです。だから、反対側なのですけれども、やっぱり海田も都会ですよ。都会でしょう。自然とか、人のつながりみたいなのは、どっちかという薄いのではないかという感じがしていたのですけれども、きょうのお話だと、木林さんの今のお話にしても、皆さんの活動のお話にしても、そうじゃないな。都会なんだけど、そうなのだ。イメージとちょっと違うなど。

もう一つ、自然がとても豊かというところですね。五日市だと、奥のほうに行くと山なのですけれども、私は楽々園で、海のすぐそばでしたので、あまり自然を感じるということにはなかったのです。それで、皆さん、日浦山とか瀬野川とか、とても自然と身近に暮らしていच्छるなという感じがしたのです。そういうふうに感じていますか。

(木 林)

はい。ひまわりもすごくきれいですし。

(知 事)

そうですね。五日市町の花なんか覚えていないけど、何かありますか。今は広島市になってしまいましたけど。

ありがとうございました。

(木 林)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは、ジェームスさん、お願いします。

## (ジェームス)

皆さん、こんにちは。ジェームスと申します。私は皆さんとちょっと違う話をしようと思います。というのは、何でこの海田町で、外国人一人ぼつんといえるのかなというのを思っ  
ていらっしゃるかもしれないので、簡単に自己紹介からいきたいと思います。

私が海田町に来たのは1992年、今から約19年前です。最初は広島県の方は、ジェーム  
スと聞いたら、これはやっかいな、日本語をしゃべれないだろうというふうに思っ  
ていらっしゃったようです。話をしてほっとしましたということでした。私はここに来て19年住  
んでいます。私の生活というのは、当初は会社と家だけでした。私が来たときは、海田町  
にたくさんの外国人がいました。私以外にインドの人も、ブラジル、ペルー、ほかにもた  
くさんの国々の人がいて、たまたま私は人に会うのが好きで、出て歩いていました。その  
ころ海田町国際交流協会というのができまして、その行事に私は基本的にはただで自分が  
できることなら何でもやりますということで、ボランティアで手伝いをさせてもらいなが  
ら、そのうちに、「あんた、理事になってくれんか」という話で理事になって、今、海田町  
国際交流協会の理事をやっています。

海田町国際交流協会というのは、残念ながら、長年理事をしている中でも感じているの  
は、ここにいる方々でも半数ぐらいは知らないかもしれないです。でも、1年を通してい  
ろいろな活動をやっています。海外研修でオーストラリアやマレーシアに子どもたちを  
送ったり、あとは海田町内で講演会、年に2回ポットラックパーティー。それで、海田町  
というのは都会ですから、都会の人は英語をしゃべらないといけないと。私が少し国際化  
に貢献できると思って、3年ぐらい前から国際交流協会に提案して毎週土曜日に英語サロ  
ンをやっています。朝、知事に見学していただいた日本語教室は、リーマンショック以来  
ずっと続けています。やっぱり、ここに長年、10年とか15年とか20年ぐらい住んで  
いる方々でも、仕事ばかりで日本語ができないという現実があるというのを私もつくづく  
感じました。私も外国人ですけれども、自慢ではないですけれども、特技は日本語ですの  
で、日本語で今まで食べてきていますから、今もそうです。できれば、彼らの力になれれ  
ばと思って、私もそれに参加させてもらって、手伝いをさせてもらっています。

それ以外、私は広島で暮らして、もちろん生活は海田町ですけれども、土日はやっぱり  
広島市内に出ています。やっぱり自分の母国はインドで、考えてみると、日本人と日本、  
これからの日本を長い目で考えると、国際化はどうしても必要だろうと思って、私に何が  
できるかと思ったら、英語サロンはそれでいいのですけれども、自分の国も、インドと言っ  
ても誰も知らないという現実を私はつくづく感じるのです。中央公民館は以前インドを応  
援していました。そこにも出入りした経験がありますけれども、いつの間にかそういうの  
も消えて、インドも遠くなって、先々週でしたか、知事がインドに足を運んで、カキの宣  
伝をしてくれたという話は現地の報道で知りました。私もそういうポスターを持って、今

年の8月に、もちろん県の協力もいただいて、私の母国で広島の展示交流会をしました。そのときは、やっぱり広島の方々に協力していただいて、全部自費で来てもらって、合計4日間の交流をしました。そこで、広島というのは、こっちから出て行ってPRして、もちろん向こうからも来てもらって、そういうことをしていかないといけない。国際化で何が大事かというのは、日本語教室もそうですけれども、お互いに地域の人と外国人、住んでいる外国人というのは、できるだけこの地域に何かしたいという気持ちを持っている人たちもいるので、言葉の壁をどうしたら超えてできるかというのが課題だと思います。私は外国人ですから、少し外国人同士で何か伝わるものがあるのではないかと考えています。

それ以外にも、私が考えるのは、地域というのは一人ではやっていけない。外国人は要らないとか、私もお叱りを受けたことがあります。あんた、自分の国にいてやれよとか、それは言う人は言う人であるけれども、私の使命はありますから、それでやっている。海田町でも、ここにいらっしゃる皆さんも立派な活動をされていますけれども、何かの関係で少しは顔を知っている、活動のかかわりもあるというのもある。ただし、一番残念に思うことがあります。活動してきて、外国の方々、私は別として、来る皆さんは、大体来てすぐにどこかの仕事に就いて、1日中仕事です。今、日本語教室もやっていて感じるのが、残業で、リーマンショック以来、当初は60人弱ぐらい来ていたのが、今、毎週水曜日は平均して十数人です。減りました。原因は何かというと、残業で出てこれないということです。海田町ではそうだけれども、広島県でもそうです。できれば、企業というのは、人を使っている、手順書があるから、それでやればできるという説明もときどき聞くのだけれど、それ以上に彼らは生活があって、この社会に住んでいるのだから、提案ですけれども、企業は週に1回、1時間でも彼らの日本語の支援をしていただけないかと。多分残業代を払わなくても、彼らは喜んで残ると思います。そういう活動ができないかというのはあります。行政も、そういう企業に働き掛けるというのも、社会の問題を解決するにあたっては大事ではないかと感じています。長く長くしゃべったのですけれども、時間を見たら、かなり皆さん短めにしゃべっているから、それをできるだけたくさん使わせてもらえるかなと思って安心してしゃべりました。

(知 事)

ありがとうございました。おっしゃるとおり、私は先日インドに行ってきました。たしかジェームスさんの御出身はケララ州でしたね。

(ジェームス)

はい。ケララ州です。

#### (知 事)

隣のタミル・ナドゥ州に行ってきました、本当に改めて思ったのが、インドと広島はお互い似ていると思うのです。何が似ているかというと、インドを知らない日本人はいないのです。カレーも日本人は大好きで、インドのカレーとは全然違いますけれども、大好きな食べもので、だけど、インドのことはおっしゃるように知らないのです。インドが本当にどんなところかは知らない。インドの人も、皆さん広島は知っているわけです。広島は知っているけれども、広島がどんなところかは知らないのです。だから、そういう意味では、昔から、仏教もインドから来たわけですし、深い関係があって、お互いよく知っているようなつもりなのだけど、知らないというのが似ているなという感じがちょっとしたのです。

#### (ジェームス)

そうですね。そういうことで、今回、私の地元で、あなたは広島に住んでいるけれども、広島に原爆が落とされた。広島は大変だったね。でも、今、広島はどうかという話をよく聞かれて、だから、私は広島のもっと具体的な話をしましょうということで、こういうポスターとかを持って、もちろん国際室から企業PRに使っているDVDを持っていったり、被爆者の被爆証言をしたり、原爆展示をしたりして、少しはなるほどと。でも、それでもまだほんの少しですから。

#### (知 事)

でも、国際交流というのは、そういう地道な活動が大事だと思いますし、この度、新たに「ひろしま未来チャレンジビジョン」というのを作りまして、これから10年後、広島県がどういうふうになっていきたいかというビジョンです。そのキーワードの一つにグローバル化というのがあります。グローバル化というのがどういうことなのかと言うと、グローバル化という、すごく大変なことのような感じがするかもしれないけれども、実際には、そうやってお互い理解する。どういうところか知る。外国の人と普通に話ができ、普通に例えばビジネスであれば商売ができて、一緒に暮らしていけるということがグローバル化だと思うのです。もちろん世界に出て行って、いろいろな丁々発止、ビジネスをしたりする人もいますけれども、そうではなくて、日常の中で違う文化とか、違う言葉を持っている人たちがいて、そういう人たちと一緒にやっていけるということがグローバル化ということだと思います。おっしゃるようにこれからはそれが不可欠で、インドも見に行くと本当によく分かるのですけれども、ものすごい勢いで変化していますから、ちょっとその先を進んでいるのが中国で、こういった国々と日本は別々に生きていくことは絶対にできませんから、必然なのです。そういう意味で、ジェームスさんがこうやってインドからいらっしゃって、広島で暮らしていただいているというのが、それ自体、地域



にとってはすごくいい影響だと思うのです。

(ジェームス)

私が思うのは、生活です。ここで食べていっていますから、皆さんにお世話になって、よく考えたら、私の人生で一番長く住んでいるのは広島県の海田町です。だから、私のふるさとと言ったら生まれ育ったところだから、第二にするか、第一にするか、というのは微妙なところですよ。

(知 事)

そうですか。ありがとうございます。

私がもう一つ思ったのが、朝、日本語教室のボランティアを見せていただいたのですけれども、きょうも十数人いらっしゃっていました。日本人の方もいらっしゃって、ボランティアで教えていらっしゃるのです。日常会話を勉強したいという人もいれば、日本語検定をやっている人もいたり、介護士の資格を取得するための勉強を、日本語でやられている方とか、いろいろな方がいらっしゃるのです。皆さんそれをとっても、それぞれにあわせて温かく一緒に勉強されていて、そういうのが本当にグローバル化だという気がするのです。それがすごく、ある意味でいうと海田の財産ではないかという感じがしました。

(ジェームス)

もう一つPRしますと、私は海田町の皆さんに交流をもっとしてもらえたらいいなと思って、2年ぐらい前から、海田町の東海田公民館のロビーを活用して、夕方のインドと言ったらチャイなので、インドチャイ倶楽部ひろしまというのを3年前に立ち上げました。チャイを持って、そのロビーに座って、石橋さんとか、この会場にいらっしゃる何人か、井戸端会議ではないですけども、そんな感じで、吉本さんもとときどき顔を出したり、そういう場をつくっているのです。皆さんも木曜日の夕方6時半から8時まで、東海田公民館のロビーにチャイを持ってそうやっておしゃべりしています。

(知 事)

本当にチャイを出されるのですか。

(ジェームス)

もちろん。

(知 事)

チャイはおいしいですよ。

(ジェームス)

それは私のこづかいを削って、持っていっています。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、吉本さん、お願いいたします。

(吉 本)

私は、「かいた七夕さん」を起ち上げた海田町民文化振興会の吉本です。

まず、説明するのに、ここにいる皆さんには手伝ってもらっているのですけれども、文化振興会というのは、約 20 年前に生涯学習課というのがたしか行政指導でできたと思います。このときに、海田町も約 22 年前に立ち上がりまして、そのときに有志、文化、芸能、特技のある方をということで 7 名の方が呼ばれました。私もその中の 1 人だったのですけれども、現在残っているのは、当初のメンバー 7 人の中で 2 人しかいなくなりまして、みんな天上の方になられたのですけれども、いま現在は二十数名のメンバーで行事を行っています。

その文化振興会を起ち上げて、何をしようかということが最初にあったのですけれども、豊かなまちをつくろうじゃないか、日本一のまちにしようじゃないかというのをスローガンにしたのです。スローガンが出来て、何をどうしようというのを模索したのです。みんなまちの特徴のことを言っていたのですけれども、私は、文化というのは遊びじゃないかと思ひまして、そんなこんなで 4 年、5 年とたつうちに、この海田町のまちというのは、両サイドは山、そして真ん中に川、そして道路があつて、これほどいい場所はないじゃないかということで、それが七夕にひついたので。そして、7 月 7 日、7 時 7 分で起ち上げて、今年で 16 回目の七夕をやりました。当初は私も代表をやったりしていたのですけれども、今は事務局ということですとずっとやっております。その間、いろいろな方々の協力を得て、先ほどのように海外の方、また地元の企業の方の応援によって、テナント、店舗をつくり、当初はステージも、起ち上げたメンバーが少ないですから、戸板とかベニア板を引いたようなところで音楽演奏をやったり、いろいろなことをやりました。地域の方の協力があつてできたのです。ちょうどそのころはまだフェスタひまわりというのがありまして、駅前に大きな祭りがありました。東海田の祭りにしようじゃないかという祭りもあつたのですけれども、そうこうしているうちに、お金もないですから、フェスタひまわりのほうはなくなりまして、今、我々の、16 年になりますけれども、本当に手弁当で、そして、各企業の方の協力と寄附によって、約 50 万円のお金で、あとは本当に材料から人から全部手弁当でやっております。

その中にこういう海外の方，国際交流の方，企業の方，あるいは小学生，中学生，最近では，中学生がボランティアでごみ拾いを率先して，2校の中学校，西中と海田中学校の中学生，そして高校生も，高等学校も協力してボランティアに出てくれるというふうな，まちを挙げての大きなイベントになりました。だから，当初の4～5年は，東京から40～50万円かけて芸能界の方を呼んでいました。しかし，そういうご時世ではありませんし，町からの金もありませんので，今は文化振興会としても緊縮の状態です。七夕は七夕，振興会は振興会として独立して活動しています。この間も浜田のほうへ神楽を見に，あるいは石正美術館のほうへと。あるいは，去年も上下町がむらおこしをやっている。非常にいいよということで，ひな祭りを見にいたり，足立美術館へ行ったり，港町のある御手洗のほうへ行ってみたり，町の44人の方を1台のバスを借り切って行っております。今年は行事と重なってちょっと少なかったのですが，毎回50人，70人，80人と，くじで通らないと行けないという状況で，また，行くのにも予算は自前，受益者負担ということで，基本的には4,000円の費用をみんな出して，自分自分の費用で，そして，みんな財産を持って帰るということをやっております。

皆さんの協力があるから，文化振興もできて，きょう現在もあります。途中でいいこといっぱい展というのも起ち上げたのですが，交流という面からいくと，4校の小学校を中心にしたらもっとおもしろいのではなからうかということで，事務局をしていたのですが，各学校のPTAにお願いして，学校の交流も一回りぐるっとした段階で，PTAの方々が3年ぐらいで役員，会長さんがかわられますよね。そうすると，維持運営がやっぱり難しいと。何とかしてもらえないだろうかということですが，今，休眠状態になっているのです。それを考えますと，七夕というのは今もう16年，当初の思い出からいうと，3,000人ぐらいが，去年は8,000人，今では目玉に七夕笹飾りということで，瀬野川をずっと，今年は88本の本数を飾ることができました。これには小学校，幼稚園，保育園，それから個人の方も，私のも飾ってというふうに声がかかりまして，瀬野川という自然，いい状況があるために飾ることができまして，盛り上がりことができました。何年前までは，3時ごろから夜の9時までというのが，今では昼から，「いつ始まるの」と。そして，9時ぎりぎりまで，雨が降っても，みな最後までいてくれて，最後に小さな花火を上げるのです。本当は大きい花火を上げたいのですが，国道とJRの関係で条件が厳しくて，小さな花火を上げる。それでもみんな楽しみに来てくれているのが現状です。皆さん，先から出ているように，非常に文化に興味のある，みんな自分たちボランティアで，だんだんと行政からのお金がじわりじわりカットされて，いつかなくなると，そういう面を感じているところです。私もほかの件で，この場をかりて，知事さんがいらっしゃるので言わせてもらいますと，広島県で文化フェスティバルをやっていますね。ここも，今年の3月に2市4町の文化フェスティバルをはじめて20年ぶりに海田町でやったのですけれども，海田町は文化ホールがないというので，今までは2市4町のほかのところ

やらせてもらっていたのです。海田町はその2市4町の中でもないのということで、小さくてもいいじゃないのということで、20回目という大きなイベントを今年はじめてやらせてもらいました。これも住民の方、また地域の方々、2市4町の方の協力によって盛大にできて、よかったよと言ってもらったのです。

そういう行事をやっている中で、緊縮財政と言いながら、今回も県の仕分けということで、この間2市4町の会合を熊野でやったのですけれども、会長さんいわく、代表会長は知事さんなのだけど、予算が、仕分けでお金を落とされて、だんだんなくなるんだよと。今回、海田町でやったときも非常に予算がなくて、ないなりに住民の協力によってできたのですけれども、そういう文化とか、こういう皆さん我々が今、代表で言わせてもらっていますけれども、予算のほう、そういう面では何らかの援助を行政のほうからもほしいなと。町のほうは目いっぱい出してもらっていますので、町のほうにお願いするのは難しいので、さっき森川さんからもあったように、行政の目からも、やっぱり継承していく上では、その辺をお願いしたいと思います。七夕のときは3世代交流ということで、幼稚園児が出る遊技のときには、おじいちゃん、おばあちゃんが応援に来るのです。非常にいいなというイメージを受けます。中学生、高校生もそれに参加してくれます。一番恥ずかしいという年頃ですけれども、アピールを結構してくれます。中には年配の方も、自分たちの芸能を披露してくれますので、そういうふうなことで、私なりにやらせてもらっています。よろしくをお願いします。

#### (知 事)

ありがとうございます。今の七夕祭りは16回続いていらっしゃるということで、しかも、人数が最初は3,000人だったのが、今は8,000人と、この鍵は何なのでしょうね。

#### (吉 本)

やはりみんなの自分たちの持っている力をアピールしたいということと、先ほどから出ているようにインドの方にしてもしかり、ブラジルの方にしてもしかり、中国の人にしてもしかり、海外の方の交流の場がないのです。したがって、その当日には結構な方が見えます。そして、これまたボランティアで、自分のところにある浴衣を持ってきて、寄附してくれて、着付け教室もやっているのです。その着付け教室によって、海外の方にも着せてあげよう。子どもたちには、今、私はカヌーをつくっているのですけれども、手作りのカヌーを、せっきく瀬野川があるということで、瀬野川に浮かべて、子どもたちに自分たちで乗せて、瀬野川を使ってみんなに親しみを与えて、動いているところです。そういうことから、廿日市、東広島からも見えます。アンケートをとっているのです、分かるのです。

(知 事)

皆さんのそういう活動がますます発展していく、それがまちのよさですね。だんだんとそれがたまっていくというか、ここで七夕があり、ここで瀬野川の清掃活動があり、いろいろなところで活動がある。その集大成がまちの活気ですね。

(吉 本)

そうです。だから、海田町の自慢である日浦山、367m ですけども、これによく皆さん来られるのです。これも山があり、川がありということで、一番海田町はいいところ。そして、また、県から日浦山の林道も補助してもらったりしていますので、いいところはよくよく、少しずつ援助を入れてほしいと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。

## 自由討論

(知 事)

ありがとうございました。皆様の御協力によって、今日はまだ 25 分ほど時間がありますので、少し全員でのディスカッションをさせていただきたいと思います。

今日、ちょっと驚きの事実が一つあるのです。それは何かと言うと、今日、皆さん、全員、ボランティア活動に携わっている人なのです。全員がです。木林さんは学校の活動の一環とはいえ、お年寄りとともに松花堂弁当と一緒に食べ、そうやって喜んでいただくということでかかわっていらっしゃるし、野崎さんも企業の活動ですけども、企業としてのボランティア活動ですね。そこにかかわっておられるということで、あとの皆さんは本当に直接的ないわゆるボランティアの団体でリーダーをやっておられるのですけれども、この海田のボランティアパワーというのは、何か特別なものがあるのですか。何でこんなに盛んなのですか。

(中 村)

僕自身が海田に住んでちょうど 20 年になるのですけれども、もともと僕は比婆郡東城町、今は庄原市なのですけれども、山の中で育ちました。そこより自然、生き物が多いです。

(知 事)

ちょっと待ってください。東城ですね。

(中 村)

考えられないと思うのですけれども。

(知 事)

僕も東城は何度も行ってはいますけれども。

(中 村)

今は、里山と山間部との逆転現象が起きています。山間部では農薬をたくさん使う分、生き物が減ってくるのですけれども、人が住み出すことによって、農薬が減って、なおかつ、ちょうど僕らの保護活動に加えて、瀬野川の下水道整備が一気にいったのです。そこにタイコウチとかシマゲンゴロウとか、ちょっと聞いたことあると思うけど、そういうものがごくわずかに残っていたのです。それがちょうど引き金で、瀬野川にたくさんいるというのが分かって、こんないい川を何で壊してしまうのかと思って、動き出したのがちょうど 10 年前だった。だから、もともと、海田町の瀬野川というのは、すごく底力のある川だったのです。地元の人に分かっていなかっただけで、たまたま田舎から僕が来て、これだけいい川があるのに何で放っておくのかと疑問に思って、ちょっと動いたらこういう形になったのですけれども、もとがよかったのです。

(知 事)

なるほどね。もともと力があったのですね。

ほかの方はいかがですか。石橋さん、お願いします。

(石 橋)

私はまちづくりを通して海田町を見てみますと、私も呉出身なのです。海田町に住みまして 25 年ぐらいになるのですが、外から来た人たち、私は外から来ましたけれども、海田って山あり、川あり、文化、歴史もあって、本当にコンパクトの中に、先ほど知事も言われたように、病院だって、市内に行こうと思えばすぐそこにある。本当にぱっと見つめると、宝物がいっぱいあるということに、私ら外から来ると、すごいまちなのだというのをすごく感じたのです。

私の場合は、まちづくりの話が生涯学習というところから出てきまして、そういう学びの場、まちづくり講座という学びの場を提供してもらったことで、きらっと光るものが見えてきました。客観的にいろいろなことを感じるができる人というのがたくさん増えて、きらきら光っている人がまちの財産なのです。私たちは生きがい課で人材を紹介しているのですけれども、人の財産がいっぱいあるまちなのだという事に気づきました。そ

して、祭りや、瀬野川での活動など、いろいろなもので人を呼びつけて、みんなで参加しませんかというふうに声をかけてもらうことが、人をつくる、まちをつくるにつながったのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。ほかに。ジェームスさん。

(ジェームス)

皆さん、プラスの話ばかりするところで、ちょっとマイナスの話なのですけれども、というのは、私もここに住んでいろいろな活動をして、いろいろなところに足を運んでいます。ここにこれだけボランティアの方々、自分で自主的な活動をされている方がいるというのもちょっと変だなと思うのです。さっき森川さんが一つ問題提起をされました。横のつながりが無い。とりまとめていない。だから、皆さんは小さく、ところどころ光っているのですけれども、まとめて、トヨタの新しい車ではないのですけれども、まとめて光る、もっと売れるようなものにすれば、もっといいのではないかという気がします。そこに海田町の皆さんのまとまりが、いまいまだ不十分ではないかと感じている私でございます。

(知 事)

なるほど。でも、それはぜいたくな悩みのほうですね。

(ジェームス)

いや、それはぜいたくではなく、今の社会問題というのは、それぞれの孤立感から生まれているものですので、木林さんとか、ああいう学校でやっていることも、もちろん高齢化しているところで一人暮らししている。あとは近所とのつき合いがないというのは、今、海田町にも十分ある話で、そこはぜいたくではなく、もう少し皆さんが声をかけあって、「こんにちは」と声をかける人がいるにしても、何人いるか、ちょっとどうかと思うところもありますから。

(知 事)

それはどうしても都会ですからね。

(ジェームス)

そこをもっと皆さん、都会だから、田舎のような都会になってほしいですね。

(知 事)

そうですね。ぜいたくなと言いましたけれども、実際に、ジェームスさんがおっしゃるとおりで、横のつながりが出てくると、本当に大きな力になっていきますよね。それは、別に同じ活動でなくても、全然違う活動でもそうだと思うのですけれども、ほかの方々がどういうことをやっていたらいいのかというのを理解して、連携していく、連帯していくというのはすごく意義があると思いますね。そういう活動の場の問題みたいな、具体的なことももちろんそうですし、それだけではなくて、お互い刺激し合うという部分でも大きいですし、ほかの人のイベントに行ったりとか、そういうものもありますしね。

(ジェームス)

そういう意味では、今日は本当に広島県知事がここに来ていただいたということは、とても海田町にとっては意味のあることだと私は思っています。こういうふうに出会うこと、お互いのことを聞く機会もつくっていただいて、ありがとうございます。

(知 事)

こちらこそありがとうございます。

(石 橋)

私たちは、今、ジェームスさんも皆さんもおっしゃったように、人がつながるまちづくりを目指しています。どうしたらつながるのかという問題点を含めながら、自分たちで考えるだけではなくて、どうつながっていくのか、どこに問題があるのかということに着眼することが今、言った地域を起こしたり、いいものを発見できたり、地産地消になったりしていくのではないかと思います。皆さん、どうでしょう。

(知 事)

広瀬さん。

(広 瀬)

ここは小学校が四つありまして、中学校は二つ、高等学校は二つあります。その学校とのかかわりをみんなやっていたらいいので、そこがボランティアのもとだと思います。

(知 事)

学校とのかかわりですね。

森本さん。

(森 本)



多分このボランティアができる前は、そこまで環境が整備されていなかったと思うのです。多分森川さんとかも、自分が子育てをしているときは、そういう場所がほしかった。だから、私たちもそういうママたちがほしかった。皆さん、そういう環境であってほしかったという状況を自分たちがやろうと発起されたと思うのです。そういう環境の一步を出させてくださったのは、私たちの場合は役場だったり、行政だったのですけれども、そういう後押しが少しあったのが、この海田町ならではなのかなと思ったりします。ただ、その後は、自分たちで歩いていかないといけないので、本当にそれが皆さん、控え室でも、本当に既成的な問題という形で苦になっているところはあるのですけれども、そこは横のつながりを工夫していくしかないのかなと思ったりはします。

(知 事)

森川さん。

(森 川)

今、森本さんのお声で言わせていただきたいのは、私は音楽ボランティアをする前に、起ち上げたのが海田フルートアンサンブルという団体があるのですが、これは 20 年になります。何でこの海田フルートアンサンブルを立ち上げたかという、海田町には告別式の放送が流れるのです。何々町の何々さんがお亡くなりになりました。告別式をやりますと。それを聞いて、親族、知り合いの方以外、当然ながら誰も知らないですよ。親族じゃなくてよかった。親しい人じゃなくてよかったと、そう思える自分がすごく寂しくなったのです。自分もこのまま家庭の中に入って、自然と消滅したときに、どれだけの方が自分の存在を知ってくれているか。自分の存在感というのがどこにあるのだろうと考えたときにちょっと寂しくなりました。その当時、自分はフルートしかなくて、フルートアンサンブルの団体があれば入りたいと。自分から起ち上げる気持ちはさらさらなかったもので、探していたけれどもなかなか見つからず、そしたら、町の職員の方が音楽関係をされていて、海田公民館の館長さんの後押しがございまして、ないなら自分でつくれよと、簡単なことを言われました。その誘惑に負けまして、自分で海田フルートアンサンブルを立ち上げて、いまに至るのですけれども、やはり少しそういった後押しをしてくださる方がいらっしやったら、出会いもあって、やりたいこといっぱいお持ちの方が後ろにもいらっしやると思うのですけれども、何かそういったアドバイザーみたいな方がいらっしやるのも何かあるのではないかと思います。ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。そういう意味では、森川さんの SAKURA GARDEN とか、ほかの活動もこのフルートアンサンブルでの経験が生きているということですかね。

(森 川)

海田フルートアンサンブルを起ち上げて、温度差を感じました。同じ楽器でも、皆さん違うのです。発表の場を求めている方、それから公民館活動というか、講座の一つとして勉強するだけでいいよという方もいらっしゃいます。曲によっては、難しい曲があるので、それをひたすら追求したい方など、十人十色なのです。私も戸惑ったことがございまして、それだったら違う楽器で違うジャンルの方でも、温度が一緒の方だったらいろいろなことができるのではないかというふうに起ち上げたのが SAKURA GARDEN で、今、17 団体、60 名近くの者が動いております。

(知 事)

だんだんと発展している様子がよく分かりますよね。

(森 川)

はい。だから、最初はフルートのアンサンブルのみのロビーコンサートから始めて、2 団体なり、3 団体なり、コンサートを増やしていこうということで起ち上げていきました。

(知 事)

なるほどね。ありがとうございます。

そうやって皆さん、こういうことがほしい、ああいうことがほしいというのが普通いろいろあるのです。それはどこにでもあるのです。それが行動に結びつくというのが、結構ハードルが高いのです、普通は。こうあったらいいな、あああったらいいな、こうしたいな、ああしたいなというのは、これは人間皆さん持っているのですけれども、それを実際にやってしまうという、これが大きな違いを生んでいることで、僕も実は県庁の中での研修などで言うことがあって、県庁なので成果ということ結びつけて言っているのですけれども、成果というのは、考え掛ける行動(成果=考え×行動)ですと言っているのです。いい考えが幾らあっても、それを行動しなければ、掛け算なのでゼロなのです。つまり、いい考え1があっても、行動が0だったら、 $1 \times 0 = 0$ と。足し算だったら $1 + 0 = 1$ なのですけれども、掛け算なのです。考えと行動があってはじめて1になる。ときどきその逆の例で、行動だけで考えがないのもだめなのだというのを仕事の中では話をしているのです。あと、行動がマイナスだったらマイナスの成果が生まれるとか、いろいろな応用があるのですけれども、それはちょっと置いておいて、本当にそこの行動をされるというステップが大きく違うと思います。そういう意味では、海田町の皆さんはそうやって自分で起ち上げてこられたという方がたくさんいらっしゃるわけですけれども、今日は本当にそういう方がほとんどで、私は驚いているというか、すごい行動力ある方たちが集まっていらっ

しゃるなという感じがしました。

行政の後押しというのも本当にそのとおりだと思います。行政がこうやりなさいと言うのではなくて、皆さんがそうやりたいと。何か悩んでいるときに、そっと押してあげる。それによって、本当にいい活動がどんどんできているということで、そこの行政としての海田町の役割も大きいのではないかというのを今日は感じました。町関係者もいらっしやいますけれども、本当にそう思いました。すばらしいなという印象を持っております。

あと、もう少しありますので、もう一つ、私がお伺いしたいことがあったのですが、石橋さんが呉ですね。中村さんが東城からいらっしやったということで、野崎さんは東京から、ほかの皆さんはどうですか。

(広 瀬)

長崎です。

(知 事)

森川さんは。

(森 川)

生まれも育ちも、いまだに海田です。地元です。だから、結婚したら当然ここから立ち退けるかと思っていたのですけれども、主人は東広島市西条町で、そっちのほうに行くのかなと思ったら私が呼んでいました。

(知 事)

吸引力が強かったのですね。

(森 川)

はい。すーっと呼びました。いろいろありましたけれども、住み心地のいい海田町で。

(知 事)

森本さんは。

(森 本)

私は父が転勤族でしたので、宇都宮のほうで生まれて、ずっと転勤して、中学校から広島の方にいます。結婚して、緑がすごくきれいで、子育てするにはいいよと伺って、海田のほうに12年前に来ました。

(知 事)

中学校から広島のほかのところにいらっしゃったけれども、海田に移ってこられたということですね。

(森 本)

はい。そうです。

(知 事)

木林さんは海田生まれですね。

(木 林)

はい。

(知 事)

ジェームスさんはインド。吉本さんは。

(吉 本)

私は山口県柳井から来ました。ただ、父も母も青春は軍隊時代ですから広島で。そのときに、親戚とか身内がこっちにいますので、来るたびに、広島はいいなと。私はほかに出る予定だったのですけれども、途中下車でここへ、もう 42 年ほど。

(知 事)

それはずっと海田なのですか。

(吉 本)

広島市内に 4 年におりました。それから、ここです。

(知 事)

ほとんど海田ですね。

(吉 本)

はい。いいところで、私が仕事上、中国地方というか、日本全国大体行きますけれども、やっぱり住んでみて、いろいろ役所関係を回っても、この海田町は小国家で、中央にすぐ、ものが言える、答えてくれる、という感じで、非常に海田はいいな。住みやすいということで、海田に事務所をおろさせてもらって、そのおかげでボランティアをさせてもらっ

ているということです。

(知 事)

海田の人口構成から言うと、こんな感じなのかなというか、もともと海田にいらっしゃるという方がもうちょっと多くてもいいのでしょうかけれども。でも、生まれは別のところという方が結構多いですが、その割にはと言うとちょっと語弊があるかも知れませんが、皆さん I LOVE 海田という感じですよ。それは、皆さんのふるさとと比べても、そうなのですか。うんうんとおっしゃっていますが。

(広 瀬)

ちょっと違いますよね。それはやっぱり住みやすいということがあると思います。

(知 事)

なるほどね。最後にもう一回同じ質問かもしれませんが、いろいろ自然があるというお話もあったのですけれども、いいところ、悪いところは、どこでしょう、海田町。

(中 村)

この活動をやっていてよかったのは、どんどん 10 年前よりよくなったというのが確かにあります。

(知 事)

よくなっているということですね。

(中 村)

完全によくなっています。水もきれいになっています。

もう一つ言いたいのは、今年から役場の人も支援してくれ始めましたが、企業努力でやってくれている工事の、僕らの要望を聞いてくれているのが、もっと地元の人とか、県の人、それを企業努力でやっているということを評価してほしいというのがあります。

例えば、治水工事というので、中州を工事する迂回するときでも、僕の提案を聞いてもらった大きい工事があったのですけれども、それは一切広報には出ていないわけです。今年魚道をつくってくれた地元の業者さんがいらっしゃったのですけれども、それもこれだけの魚道、広島大学の先生と話をして、こういうのだったらいいのではないかとやったけど、それが僕ら以外に、どこにも出ていないのです。あれは、お金をかけたわけじゃないけれども、企業努力でただでやってくれているので、せめて人が知ってくれたら。広報で伝える場所があったら、その人たちがもっと報われると思うのです。全く知られていないので

す。そういうところを拾ってくれればと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。

その他の方、木林さん、どうですか。

(木 林)

海田町に住んでいて、この辺でいくと保育所もありますし、小学校もありますし、そういうところを見ていくと、ちょっと暗い道が多いのかなと思うのが悪いところというか、もう少し電灯とかを増やしていただけたら、子どもたちも安全ですし、お年寄りの方とかも夜道を歩くのが危険じゃないかなと思います。

(知 事)

ありがとうございます。ほかにどなたか、最後にこれは言っておきたいということがあれば。森本さん、ありますか。

(森 本)

いいところは、やっぱり私たちの周りには賛同してくれる友がいる。それをやっぱり支えてくれる行政や、周りの人がいるというのがいいところだと思います。

どうしても希望としては、私は男の子3人で、野球ができるところがなくて。

(知 事)

さっきの公園とも通じますね。

(森 本)

そうですね。

(野 崎)

奥のほうにあります。

(知 事)

上のところですね。

(森 本)

歩いて行って、20分か30分かけて行って野球をするという形で、ちょっとマナーも悪

いのですけれども、子どもたちも頑張っているので、公園が、野球ができる公園がほしいなと思っているところです。

(知 事)

そうですね。僕もそれが悩みなのです。今、井口に住んでいるのですけれども、野球ができる広いところまでは、歩いて 30 分ぐらいかかるのです。

ありがとうございます。野崎さんはいかがですか。

(野 崎)

子どもの話が出ましたので、私みたいな通勤族になりますと、子どもの学校での生活というのが非常に気になるものですから、学校のほうはどうだということでも聞くのですけれども、海田の小学生はみんな優しいと。東京の子どもたちに比べて、非常にみんな優しいと。東京の子どもたちは、ゲームとかの影響もあるかもしれないのですけれども、すぐ「死ね」とか、子どもなのにそういう言葉を使ってしまうということらしいのですが、そういったことを全然聞かない。みんな心が非常に優しいのではないかというのが、非常に安心しました。

(知 事)

それは将来に向けてすごくいいお話ですね。ありがとうございます。

## 閉 会

(知 事)

というところで、大体時間になりましたので、ここで締めさせていただきます。

改めまして、今日は本当に長い間お付き合いをいただきましてありがとうございました。今日は、本当に絵に描いたような進行で、めったにうまくいかないのですけれども、今日は皆さんの御協力で、いろいろな方に活発に御発言をいただいた中で、比較的きっちり時間も使えて、本当によかったと思います。

いただいたいろいろな貴重な御意見は、冒頭に申し上げましたように、一つ一つこれをやりますというよりは、いろいろな積み重ねが大事だと思っていまして、こういう会を実は 23 市町やると、大体 230 人ぐらいの方々の御意見をいただくことになるのです。もちろんそれらすべてが必ずしも皆さんの代表の意見というわけではないのですけれども、でも、日ごろ感じていらっしゃることと、我々が、私だけではなくて、県庁のスタッフもそうなのですけれども、同じ目線で感じるということが非常に大事だと思っておりますので、そう

いう意味で、今日のように忌憚のない御意見をいただいたのはありがたいことだと思っております。これからいい味噌をつくれますので、本当にありがとうございました。

また、傍聴の皆様も、長い時間、2時間、お付き合いをいただきまして本当にありがとうございました。我々はどうやってしゃべっているからいいのですけれども、聞いていらっしゃる2時間というのは結構長いですね。本当にありがとうございました。こうやって皆さんの御意見を聞かれるというのは、町の皆さんにとってももちろんいいことだと思います。これを機にまた海田町が活発になっていければ、我々としても大変うれしいことだと思っております。

それではこれで終了とさせていただきます。本当にありがとうございました。